

アドルフォ・サルコリの音楽活動に関する研究(3) —1916年から1920年のサルコリ関連の資料を中心に—

A study of Adolfo Sarcoli's Music Activities (3)
— Focusing on Documents Relating to Sarcoli, from 1916 to 1920 —

直江 学 美 (人間科学部こども学科准教授)

Manami NAOE (Faculty of Human Sciences, Department of Child Study, Associate Professor)

〈要旨〉

本研究では、1916(大正5)年から1920(大正9)年の間に日本で書かれた、アドルフォ・サルコリ(1867-1936)に関する資料を調査し、報告する。

これら資料を考察し、1916年から1920年に日本で行われたサルコリの音楽活動に関する報告と検証を行う。検証を基に、最終的にはサルコリが日本の音楽界に与えた影響を考察したい。

〈キーワード〉

アドルフォ・サルコリ, 西洋音楽受容, イタリアオペラ

はじめに

筆者はこれまで、アドルフォ・サルコリの音楽活動を調査、報告してきた。サルコリが来日した1911(明治44)年から1912(大正元)年までにサルコリが行なった音楽活動については「金沢星稜大学『人間科学研究』第10巻第1号」に⁽¹⁾(直江 2016)、1913(大正2)年から1915(大正4)年については、同巻第2号にまとめた⁽²⁾(直江 2017)。

サルコリが来日した1911年から1912年に日本で書かれたサルコリ関連の記事からは、サルコリが「声楽家」として日本の新聞や雑誌に多く取り上げられ、珍しがられていたこと、また、サルコリが当時の日本音楽界に必要とされ、日本の声楽界に新しい存在として受け入れられていたことを明らかにした。

1913年から1915年に書かれたサルコリ関連資料からは、この期間にサルコリは「指導者」としての活動が多くなり、サルコリが「日本に定着した」ことを指摘した⁽¹⁾。1911年から1912年、1913年から1915年のいずれの期間も、非常に多くのサルコリ関連資料が見つかった⁽²⁾。

これらを踏まえ、本稿では1916(大正5)年から1920(大正9)年までの5年間に日本で書かれたサルコリ関連の資料を報告し、それらを基に、サルコリの音楽活動を明らかにし、日本にサルコリが与えた影響を検証したい。1916年から1920年はサルコリが49歳から53歳の年にあたる。

なお、表記は出来る限り記載のままとし、()は筆者の補筆とする。

1 1916(大正5)年のサルコリ関連記事より

1-1 1915年の音楽活動に関する記事

1916年に日本で書かれたサルコリ関連の資料を報告する。年明けしばらくは、前年にサルコリが出演した演奏会のレビューが続く。まず、1月発行の『音楽界』に、前年11月14日に開催された「カフェーパリュスタ音楽会」および、11月27日に開催された「和洋音楽會」に関する記事が見られる。

「サルコリ氏のプッチニ作曲歌劇蝶々夫人の内さらば花の君よ及伊太利ナポリの民謡私の太陽よ水賣りの花登山鐵道にての獨唱は慶應マンドリン倶楽部員のマンドリンに合せて手際鮮やかにこなし澤山した其聲量と快よき律は千の會衆を酔はしめ幕引かれて後も尚拍手の音が止まなかつた⁽³⁾」(『音楽界』1916.1)

「十一月廿七日午後一時より有樂座にて開催出演者はサルコリー氏新歸朝の葛岡宗吉氏トドロウイツチ氏夫人布哇人ダキノ及ラゾロ二氏のギター及ウケレン合奏は本邦における最初の演奏なり⁽⁴⁾」(『音楽界』1916.1)

最初に提示した「カフェーパリュスタ音楽会」に関する記事の中では、伴奏が慶應マンドリンクラブのマンドリンであったことと、曲目およびサルコリの声量に関して言及されている。また、千人の観客の拍手が鳴り止まない演奏であったことが指摘されている。次の「和洋音楽會」に関する記事には、ハワイのウクレレ演奏家と出演したことが書いてあるが、サルコリが歌で出演したのか、ギターやマ

ンドリンで出演したのかは明記されていない。

同雑誌2月号、『樂潮』「下半期の樂壇」に嶺南生の名前で前年1915年に行われた演奏会の動向が記されている。内容を次にまとめる⁵⁾。作曲家数は、演奏された回数が多い順から記載する（『音楽界』1916.2）。

【演奏会月別開催数】7月（7回）、8月（7回）、9月（5回）、10月（13回）、11月（16回）、12月（7回）。

【等級別】甲（8回）、乙（9回）、丙（15回）、丁（9回）。日比谷：軍楽（9回）、三越（6回）。

【作曲家数】

ヴェルディ（27回）、ショパン（12回）、メンデルスゾーン（12回）、ベートーヴェン（11回）、マイアベーア（11回）、シューマン（10回）、モーツァルト（9回）、バッハ（8回）、ビゼー（8回）、ハイドン（7回）、グノー（6回）、プッチーニ（6回）、ブラームス（6回）、ロッシーニ（6回）、ウエーバー（6回）

嶺南生によると、1915年の下半期に行われた演奏会の回数は合計57回で、丁を除くと、48回だという（甲乙丙丁がどのような区分なのかは不明である）。丁を除いた48回の演奏会で声楽家が独唱した回数を男女別にすると、男性42回、女性35回で、うち日本人出演者を出演回数が多い順に並べると、山下禎子9回、船橋榮吉8回、山田郁子7回、樋口伸平5回、長坂好子5回と続くという。嶺南生は「此外、外人にして出演せるはサルコリ氏最も多数にして、ベツツオルト夫人是れに次ぎ及びクム、シヨルツ、クロン諸氏など⁵⁾」と述べ、サルコリが外国人声楽家の中で一番多く独唱していることを指摘している。また、演奏されたとされる作曲家のうち、ヴェルディ、プッチーニ、ロッシーニはイタリアのオペラ作曲家である。イタリアのオペラ作曲家が上位に3人も入っていること、そしてヴェルディが一番多く演奏された作曲家として挙げられていることは、明治時代にドイツ音楽が主流であったことを鑑みるとイタリア出身のサルコリの影響が考えられる。

続いて同雑誌同号に「今秋の我洋樂会」のタイトルで（K）（毎日）と署名された記事にサルコリの名前が見られる。

「男聲の獨唱は例に依て聴くに足るべき者なく又遺憾ながら期待した女聲にも深い印象を與へて呉れる様なものが無かつた只だサルコリー氏のは何時も乍ら豊富な聲量で聴衆を魅了したのに考へてもツクツク我が聲樂家の貧弱に呆れた⁶⁾」。日本の声樂界が貧弱であると指摘した上で、サルコリだけは違い、豊富な声量で聴衆を魅了していたことが指摘されている（『音楽界』1916.2）。

続く「文藝界」のタイトルで、満潮と署名された記事に「帝劇に於る折々の歌劇の上場や、サルコリイ氏の數回に亘る活動や、其他諸種の慈善的音樂會たど（ママ）可成に賑

はしい演奏が催された⁷⁾」と、サルコリの名前が見られた（『音楽界』1916.2）。

1-2 上半期に書かれたサルコリ関連記事

1916年上半期に書かれ、かつ1916年の音楽活動に関するサルコリ関連記事を次に発行順に紹介する。

「演奏會の除幕 本年第一の演奏會たる音樂普及會は昨日午後一時より共立女子職業學校に開き山下禎子の冴え渡る秋の夜の如き又梁田貞氏のサルコリー式なる獨唱、愈よ妙境に入れる東儀哲三氏の洋絃獨奏並に梁田大和田東儀三氏の珍らしき三部合唱等數番あり最後に新着蓄音機を披露しカルーンにはフワラーなど名曲を奏して聴者の耳をそゝれり（れ）⁸⁾」（『都新聞』1916年1月17日）

これは1月17日付都新聞に掲載された演奏会の記事である。この記事の中に「サルコリー式なる獨唱」の文字がみられるのが興味深い。サルコリの弟子の梁田貞の発声が「サルコリー式」と表記されていたということは、サルコリの歌い方や、サルコリが指導した弟子の歌い方が、他の声樂家や指導者のものと違うこと、また当時何らかの歌い方が「サルコリ式」と認識されていたことがわかる言葉であり、日本音楽界に明らかにサルコリが影響を与えていた事が示唆された。

次のサルコリ関連記事は、『音楽界』3月号に記載されている。「小樽高校 商業學校高等音樂會の新設 同會にては其發會式を兼ねたる第一回試演會を去る二月五日（土）午後一時半より開催し非常の盛會なりき當日のプログラム右の如し」の書き出しで、演奏会のプログラムが掲載されている⁹⁾（『音楽界』1916.3）。

「第一回演奏會曲目」

一、三部合唱 春のたそがれ、山崎憲、小谷幸太郎、島村寛之

二、低音獨唱（蓄音機）甲、マダム、バタフライ乙、ラ、リゴレット、サルコリ（…）

十三、二部合唱（蓄音機）カバレリアラスチカナ三浦夫人、サルコソ（ママ）

二箇所サルコリの名前が見られるが、どちらも蓄音機と書かれている。直接歌わず、蓄音機でサルコリの演奏が流されたようである。

1月に書かれたこれらの記事からしばらくは、サルコリの名前を見つけることはできなかった。次に名前が見られるのは、5月発行の新聞と雑誌の記事である。5月12日と15日付東京朝日新聞、6月1日発行の『音楽会』にサルコリの名前が書かれた記事が3件あるが、いずれも、5月13日に行われた「オラトリオ會」という演奏会に関連した記事である。

「東京オラトリオ會演奏會 は十三日（土曜日）午後七

時より神田青年會館に於て第一回演奏會開催サルコリ氏澤田柳吉氏、鈴木のお子其他出演の筈¹⁰⁾ (『東京朝日新聞』1916年5月12日)

「東京オレトリオ (ママ) 會 (….) サルコリ氏のギター伴奏で獨唱したマンドリンの田中氏のは四番の中タランテラが一番いゝと思つた¹¹⁾ (『東京朝日新聞』1916年5月15日)

「オラトリオ會 五月十三日午後七時より神田青年會館に開く曲目左の如し (….) マンドリン『ネベル、タランテラ』(田中常彦) (….) 獨唱『トスカ外一』(サルコリー)¹²⁾ (『音楽界』1916.6)

サルコリは、5月13日(土)午後7時より神田青年會館で開催された東京オラトリオ會演奏會に出演し、田中常彦が獨奏するマンドリンのギター伴奏と、オペラ〈トスカ〉と他1曲の歌唱を行ったようである。

次に8月発行の『音楽界』の「中央樂況」にサルコリの名前が見られる。

「マンドリン俱樂部 慶應義塾内同俱樂部は六月十七日午後七時夜演奏會を開く曲目左の如し 合奏 (部員) △獨唱 (桂) △獨唱 (原信子) △ギター (サルコリー) △合唱 (原、清水) △獨唱 (清水金太郎) △同 (サルコリー) (入場券一圓、七十錢、五十錢)¹³⁾ (『音楽界』1916.8)

「神田高女學校 神田高女學校は今春創立者にて校長なる井澤里子女史を失ひ今回佐方鎮子女史を教務監督に迎へ更に校舎を新築する事となりたるが右新築費の一部に充つる爲め神田區有志及び松井子爵母堂正子其他卒業生等發起し六月廿五日 (日曜日) 午後一時半より東京音楽學校にて慈善音樂會を催し當日はザルコリー氏出演せりと¹³⁾ (『音楽界』1916.8)

前記した東京オラトリオ會から約1ヶ月後の6月17日に、サルコリは慶應マンドリンクラブの演奏會でギター演奏と獨唱を行なったこと、そして同月25日には、演奏内容は書かれていないが、東京音楽學校で行われた慈善音樂會に出演したことが記されている。

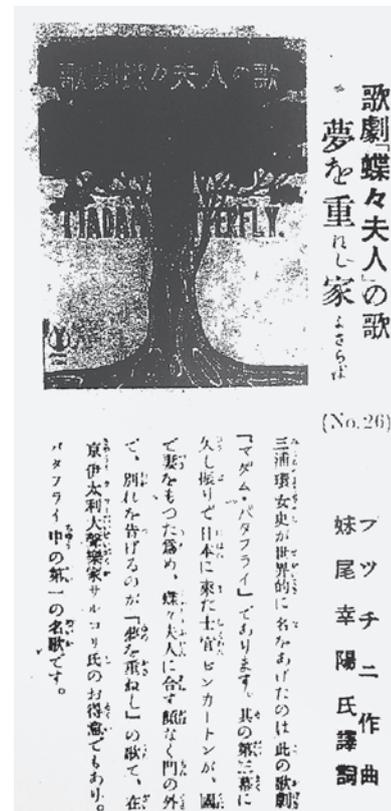
1-3 下半期に書かれたサルコリ関連記事

1916 (大正5) 年下半期に書かれたサルコリ関連記事を見ていく。下半期では、1916年11月に発行された雑誌『マンドリンとギター』に書かれた「慶應マンドリン俱樂部の“Sourire d'Amour”」に、サルコリに言及した文が掲載されている。この慶應マンドリンクラブについての記事は左十夫と朱青という連名で書かれている。記事の中からサルコリに関する部分を抜き出して提示する。

「同俱樂部がサルコリ氏田中氏等の指導を受けずして公演したのは今回が二度目ですが前回 (昨年末竹の會主催の音樂會) に無残な失敗をしたのに對し今回は誠に立派な演奏を聴かせました。此夜の演奏は確に成功であるとい

得ます。最近 (六月十七日) サルコリ氏の指揮の下に開かれた同俱樂部演奏會の成績に比しても決して遜色ありません。曲の数が少なかつたので十分餘裕のある練習が出来た為もありませう然し何よりも曲其物の撰擇が既に成功でした。いゝものを選びました。否、『いゝもの』と云ふよりも『うまいもの』、と云つた方が適當かも知れません。勿論之はサルコリ氏の援助を受けない慶應マンドリン俱樂部としての話です。¹⁴⁾ (『マンドリンとギター』1916.11)

もう一箇所、年末の音楽雑誌にサルコリの名前がセノオ楽譜の広告の中に見られる。12月1日発行の『月刊楽譜』12月号に掲載された『蝶々夫人』の aria 「夢を重ねし家よさらば」の楽譜の紹介文に「蝶々夫人に合す顔なく門の外で、別れを告げるのが「夢を重ねし」の歌で、在京伊太利大聲樂家サルコリ氏のお得意でもあり。バタフライ中の第一の名歌です¹⁵⁾ (写真1) (『月刊楽譜』1916.12)。



(写真1) 『月刊楽譜』1916年12月号

1-4 1916年のまとめ

筆者がこれまでに見つけた1916年に書かれたサルコリ関連記事は13件であった。13件の記事のうち、演奏會の案内やレビューなど演奏會に関する記事は9件で、演奏會以外の記事は4件であった。演奏會に関する記事の9件のうち2件は、前年の1915年下半期に行われた演奏會について書かれたものであり、1916年にサルコリが行った音楽活動について書かれた記事は7件であった。この7件についても同じ音樂會について書かれているものもあり、これら記

事から判明した1916年にサルコリが出演した音楽会は、5月13日に行われた「東京オラトリオ音楽会」と6月17日に行われた「慶応マンドリンクラブの音楽会」と、6月25日に行われた「慈善音楽会」の3つのみであった。

演奏活動に関する記事の他には、「慶応マンドリンクラブ」について書かれた文章の中で、同クラブがサルコリの指導を受けないまま演奏会を開催したことが書かれていた。サルコリが指導しなかったのは、慶応マンドリンクラブが意図的にサルコリの指導を受けなかったのか、もしくはサルコリが不在などのためやむなく指導を受けられなかったのかまでは分からなかったため、今後経緯を明らかにしたい。

サルコリが不在のまま開催された当該の演奏会は、10月6日に“A Trip down the Mississippi”，7日に“Sourire d'Amour”のタイトルで開かれている。これまでの調査では、日本で発行された新聞や雑誌でこの時期のサルコリの消息はわからなかった。しかし、同月28日の消印で、ニューヨークのサルコリから日本のナンナという女性へ送った手紙を見つけた。よって、サルコリが日本にいなかったため慶応マンドリンクラブの部員がやむなくサルコリの指導を受けられなかったという可能性の方が高いのではないかと推測する。しかし、それだけでは「田中氏等の指導も受けていない」という記述についての説明はつかないため、引き続き検証したい。

サルコリの声に関しては、本人の歌声に対する「豊富な声量⁶⁾」という言葉と、弟子の歌に対する「サルコリー式⁸⁾」との記述が見られたことが非常に興味深い。これらの言葉からは、サルコリの声量が豊富であり、当時の日本人にとって、サルコリが歌ったり、弟子に教えていたりした歌い方が、他の声楽家のものと違うものであると認識されていたことが伺える。

2 1917（大正6）年のサルコリ関連記事より

2-1 1917年の音楽活動

『音楽界』2月号の「新刊紹介」『歌劇リゴレット『女心の歌』』に「サルコリ氏の得意の出物堀内敬三氏の譯詩薄畫伯の表紙意装共に完堅なり。敢て好樂者の一讀を勧む。（定價金二十錢，セノオ音楽出版社）銀座四丁目四山野樂器店。⁶⁾」と、サルコリの名前が見られる。〈夢を重ねし家よさらば¹⁵⁾〉の時と同様に、〈女心の歌〉の紹介にも「サルコリ氏の得意の」とあることから、この時代、音楽界にサルコリの存在が広く認識されていたことがわかる（『音楽界』1917.2）。

次の月に発行された『音楽界』3月号「中央樂況」のヤマノ音楽会の欄には、サルコリが音楽活動を行った記事が見られる。サルコリが音楽活動を行ったことがわかる記事

が掲載されたのは、前年1916年6月以来のことである。

「銀座山野樂器店にて三月三日午後七時半帝國ホテルに於てヤマノ音楽會を催す出演者には小倉末子嬢、芝祐直氏、東儀季教氏、杉山長谷夫氏等一流の音樂家と最近米國紐育婦りの彼のザルコリリー氏（ママ）なりと¹⁷⁾」（『音楽界』1917.3）

3月3日に行われるヤマノ音楽会に、「一流の音樂家」と称される出演者とサルコリが出演すること、そして、サルコリが最近ニューヨークから帰国したことが書かれている。

上半期に発行された記事はこの2件のみであった。次にサルコリの名前が見つかったのは、9月に開かれた演奏会に関する新聞記事と雑誌記事である。9月26日付読売新聞に「サルコリー氏の彈奏」のタイトルで「石工界の名工故木田豊秀翁が七年有餘の日子を閑みして製作したる赤穂四十七義士、淺野内匠頭、天野屋利平衛の花崗石像を市内公園に寄附し精神的教育に資せん爲め後援會を組織し廿五六兩日神田青年會館に於いてサルコリー氏、澤田柳吉氏其他の音樂家出演して盛んなる音樂會を催す寫眞は第一日の光景¹⁸⁾」との記事と写真が掲載されている（『読売新聞』1917年9月26日）。

同月別の日に行われた音楽会の記事が『月刊樂譜』10月号「樂報」に掲載されている。

「九月廿一日と廿二日の兩日神田青年會館に開催の音樂會は赤穂義士石像保存後援會の主催にてサルコリー氏の獨唱（トスカの星も光りぬの歌）や澤田柳吉氏のピアノ（…）顔振れにて華々しく開演する筈なれば之れ亦非常なる盛會であらう。九月三十日は音樂普及會も陣容を改めて盛大に開會する由之亦結構なことである。¹⁹⁾」（『月刊樂譜』1917.10）

この9月21日、22日に行われた音楽会の内容は、前述した読売新聞に「25、26日に行われた」と書かれていた音楽会記事の内容と重なるところが多い。読売新聞もしくは月刊樂譜のどちらかの記事の日程が間違えて書かれた可能性が高い。しかし、いずれにせよ、この時期サルコリが日本において、音楽活動を行っていたことは明らかである。続いて10月、11月にも音楽活動を行っている記述があるので、その二つの音楽会に関する記事を次に提示する。

「慶應マンドリンクラブも来る十三日同校（東京音楽学校）講堂に於いて演奏會を開く筈にてマンドリニスト田中常彦氏サルコリー氏等の贊助出演もあり久方振りの催しとして之れ亦盛大なることであらう。²⁰⁾」（『月刊樂譜』1917.10）

この慶應マンドリンクラブの演奏会記事は『月刊樂譜』の「樂報」に記載されている。

慶應マンドリンクラブ以外の音楽会の記事は、いずれも

瀬戸口海軍軍楽隊長の退任に際しての「送別大音楽会」について書かれてあり、新聞と雑誌両方に記事が書かれている。

「●音楽會 瀬戸口海軍軍楽隊の退職に際して同氏送別の音楽會を來る十一月四日午前(ママ)一時より帝國劇場に開く事となりたるが當日は樋口伸平、小倉末子、サルコリ三氏の出演ある筈²¹⁾」(『東京朝日新聞』1917年10月19日)

「海軍々樂隊長瀬戸口藤吉氏は卅五年間専心海軍樂に盡し海軍管絃樂設置に成功したるが愈來月一五日を以て退役となるに付同月四日帝劇にて送別大音楽會を開く筈なるが當日は山田耕作氏作『曲(ママ)瀬戸口樂長に捧呈する記念曲』を演奏する外ザルコリー樋口伸平(…)七、モナー(ママ)獨唱(サルコリー氏)歌劇「トスカ」星も光りぬ²²⁾」(『月刊楽譜』1917.11)

「花輪に埋まつた瀬戸口樂長」「長く指揮棒に人気を集めた樂界の勤功者瀬戸口海軍樂長の退職に饒けすべく昨日午後零時半から帝國劇場に盛んな告別演奏を開いた、曲目に粹を集めたのと斯界の人気者小倉末子、當日サルコリ三氏の出演があつたのでヒドイ雨にも拘らず會場内外の紳士、貴婦人連中で充滿した²³⁾」(『東京朝日新聞』1917年11月5日)

これらの記事によると、瀬戸口藤吉海軍軍楽隊長の送別音楽會が11月4日に帝國劇場で開催され、サルコリは、歌劇《トスカ》の〈星も光りぬ〉を歌ったようである。また、東京朝日新聞の記事には、サルコリの出演が、雨にも関わらず多くの客が来たことにつながったと書かれており、サルコリの人気が増える記述である。

2-2 1917年のまとめ

筆者がこれまでに見つけた1917年に書かれたサルコリ関連記事は、上半期は2件と少なく、下半期も6件のみであった。これら記事から判明した1916年にサルコリが行なった音楽活動も、3月3日開催の「ヤマノ音楽會」、9月に2日に渡って行われた赤穂義士石像保存後援会主催による音楽會、10月13日に行われた慶應マンドリンクラブの演奏會、および11月4日に行われた瀬戸口海軍軍楽隊の退職告別演奏會の4つであった。

1916年6月25日に行われた演奏會の後、1917年3月3日までサルコリが日本で音楽活動を行った記録がないこと、『音楽界』3月号「中央樂況」の記事²⁴⁾の中にサルコリが最近ニューヨークから帰って来たという記述が見られるため、サルコリは1916年下半年から1917年にかけて長く日本を離れており、そのためにサルコリ関連の記事が少ないとも考えられる。

1917年は記事の数こそ少ないが、その内容には、サルコリの出演が多くの観客を呼んだという記述があった。サルコリは当時、観客が押し寄せる人気の歌い手であったこと

がわかる。

3 1918-1920 (大正7-9) 年のサルコリ関連記事より

3-1 1918-20年の音楽活動

1916年と1917年にかけて、サルコリ関連の記事は少なかったが、1918年の記事はさらに見つける事ができなかった。2017年12月現在、筆者が検索できた1918年から1920年にかけて日本で書かれたサルコリ関連記事は次の2件のみであった。

一つは1918年『月刊楽譜』1月号「銀座より」に「例のバンドマンの喜歌劇一座も六七月頃に來朝するでせう。聲樂家のサルコリー氏の處に上海にあるオペラ團が來るとか通信があつたと云ふ噂で。どうせ來ても三四流ぐらゐなところでせうが歌劇のみられない吾等は事實になることを切に望む。²⁴⁾」と書かれていた記事である。サルコリの演奏活動についての記事ではなく、サルコリの元に、上海にあるオペラ團から通信があつたとの報告である。

もう一つは、1918年10月22日付の東京朝日新聞朝刊に「◇文展特別日 文展の二十一日は開會以來初めての特別觀覽日であつた、入場料は五十錢といふのであるが悠々と鑑賞する實感の人達が多くそれに引續きて秋晴れの爽やかさに午前中に入場者が千四百五十名もあつた、例のザルコリー氏が伊太利大使夫妻と共に熱心に見廻つて居た、松室前法相や新渡戸博士などの顔も見江た。²⁵⁾」と書かれている。

この新聞記事もサルコリの演奏活動に関するものではないが、10月22日にサルコリが日本にいたこと、また、松室前法相や、新渡戸稲造と思われる「新渡戸博士」と並んでサルコリの様子が書かれている。これは音楽雑誌ではなく東京朝日新聞の記事であることから、音楽界のみならず、広く一般にもサルコリが認識されていたことがわかる。

4 まとめ

サルコリは1911(明治44)年に來日し、「日本人に珍しがられた」初期と、日本人に対して声樂教授を行うことを決め「日本に定着した」数年を経て、今回調査対象とした1916年から1920年を迎える。この期間に書かれたサルコリ関連の記事は、1911年から1915年までと比べると大幅に少ない。

しかし、数は少ないが、音楽雑誌の楽譜の宣伝には「在京伊太利大聲樂家サルコリ氏のお得意²⁵⁾」や「サルコリ氏の得意の出版物²⁶⁾」との紹介文が掲載されていること、そして1918年の文展に関する一般紙の新聞記事にも前法相や新渡戸稲造と並んで、サルコリの名前が記載されていること

を見つけた²⁹⁾。このことは、サルコリの存在が、音楽界はもとより、広く一般にも認識されていることを意味する。加えて、サルコリの出演により、多くの観客を呼んだという記述があり、サルコリは当時、広く一般の人にまで認識されていた人気の歌い手であったことが当時の記事から明らかになった。

また、都新聞に掲載された演奏会記事で、サルコリの弟子である梁田貞氏の歌に対して「サルコリー式なる独唱⁸⁾」と表現されていたことを今一度指摘したい。1916年から1920年は、サルコリが日本で声楽を教授するようになって数年経った時期である。サルコリが声楽を教授し、弟子が育ってくると、その弟子の発声を「サルコリー式なる独

唱」と世間は呼んでいたことが明らかになった。この表現は、それまで日本で歌われていた歌い方と、サルコリの歌い方が明らかに違うと認識されていたことの現れであり、また、日本人がそれまで耳にしていた歌や発声とは違うものが、サルコリの存在によって日本で聴けるようになったことが考えられる。

本研究が対象とした1916年から1920年までの5年間は、一般にも広くサルコリが認識された時期であり、またこの時期、サルコリの存在により、それまでなかった新しい歌い方が「サルコリー式なる独唱」として、日本にもたらされた。一般にも、音楽界にもサルコリが大きな影響を与えていたことが明らかになった。

引用文献

- (1) 直江学美 2016「アドルフォ・サルコリの音楽活動に関する研究(1)」。(金沢星稜大学人間科学研究第10巻第1号), 2016年9月, 23-30頁。
- (2) 直江学美 2017「アドルフォ・サルコリの音楽活動に関する研究(2)」。(金沢星稜大学人間科学研究第10巻第2号), 2017年3月, 31-40頁。
- (3) 『音楽界』1916「カフェーパリュスタ」(東京音楽社), 16年171号, 83頁。
- (4) 『音楽界』1916「和洋音楽界」(東京音楽社), 16年171号, 84頁。
- (5) 『音楽界』1916「下半期の楽壇」(東京音楽社), 16年172号, 54頁。
- (6) 『音楽界』1916「今秋の我洋楽界」(東京音楽社), 16年172号, 54-55頁。
- (7) 『音楽界』1916「文芸界」(東京音楽社), 16年172号, 56頁。
- (8) 『都新聞』1916「演奏会の序幕」。1月17日付, 3面。
- (9) 『音楽界』1916「小樽高等商業学校高商音楽会の新設」(東京音楽社), 16年173号, 52頁。
- (10) 『東京朝日新聞』1916「東京オラトリオ会演奏会」。5月12日付, 7面。
- (11) 『東京朝日新聞』1916「東京オレトリオ会」。5月15日付, 7面。
- (12) 『音楽界』1916「オラトリオ会」(東京音楽社), 16年176号, 54頁。
- (13) 『音楽界』1916「マンドリン倶楽部」(音楽音楽社), 16年178号, 73頁。
- (14) 『マンドリンとギター』1916「慶應マンドリン倶楽部の“Sourire d'Amour.”」(シンフォニア・マンドリニ・オルケストラ), 第1巻第8号, 7-8頁。
- (15) 『月刊楽譜』1916「歌劇『蝶々夫人』の歌」(山野楽器店), 16年第5巻, 12月号, 38-42頁。
- (16) 『音楽界』1917「歌劇リゴレット『女心の歌』」(東京音楽社), 17年184号, 65-66頁。
- (17) 『音楽界』1917「ヤマノ音楽会」(音楽教育会), 17年185号, 63頁。
- (18) 『読売新聞』1917「サルコリー氏の弾奏」。9月26日付, 5面。
- (19) 『月刊楽譜』1917「楽報」(山野楽器店), 第6巻10月号, 30頁。
- (20) 『月刊楽譜』1917「楽報」(山野楽器店), 第6巻10月号, 31頁。
- (21) 『東京朝日新聞』1917「音楽会」。10月19日付, 7面。
- (22) 『月刊楽譜』1917「海軍々楽隊長瀬戸口藤吉氏の退後」(山野楽器店), 第5巻11号34頁。
- (23) 『東京朝日新聞』1917「花輪に埋まった瀬戸口楽長」11月5日付, 5面。
- (24) 『月刊楽譜』1918「銀座より」(山野楽器店), 第7巻1月号, 48頁。
- (25) 『東京朝日新聞』1918「文展特別日」。10月22日付, 5面